40

疔瘡に対する松鍼法

上田善信
日本鍼灸研究会

はじめに

癰、瘡といった悪性のできものは古くからよく見られる疾患であり、医書以外に『戦国策』楚策の「夫の癘は癰種胞疾なりと雖も、上、前世に比すなれば…」（『韓非子』姦劫弑臣に類文有り）や『論衡』感虚の「夫れ山崩れて河を壅ぐは、猶ほ人の癰腫有りて、血脈の通ぜざるがごとし」などのように数多く見られる。また医書では『素問』『霊枢』中にも「癰」「癰瘍」「癰疽」「瘡瘍」などの病名が見られ、『霊枢』には癰疽という篇名があり、癰疽の発病原因、部位、癰疽の名称、治療と予後など専門に論述している。このように悪性のできものは一般によく見られる疾患であり、時には重篤にもなり、その鑑別と治療は重要なものであったことが分かる。

これら癰、瘡のような疾患に対する鍼灸治療も古くから見られ、時代が降るにつれて種々発展するが灸法（直接灸、隔物灸、騎竹馬灸法、八穴灸法など）よりも鍼法が多く見られる。この鍼法は砭石や鈹鍼を用いて患部を切開して膿や悪血を出す方法であり、場合によっては病人にかなり負担のかかる治療である。また唐代には水蛭を用いる蜞鍼法のような特殊な鍼法も行われるようになった。松鍼法もまた特殊鍼法の一つであり、管見では『急救仙方』中に見えるのみである。

『急救仙方』の構成

『急救仙方』の書誌に関しての詳論は避けるが成書年、著者は不明であり宋佚氏撰といわれており、道家に係わるもので多くの医方を集めたものである（馬継興『中医文献学』）。本書には道蔵本と四庫全書本の二種があり巻数と内容に異同がある。道蔵本によりその内容構成を見ると巻一～五は婦人科医薬方、巻六は仙授理傷続断方、巻七は治損傷方論、巻八は疔瘡治法、巻九は痔瘡治法、巻一〇～一一は上清紫庭追痨方論となっている。松鍼法に関しては道蔵本・巻八、四庫全書

本・巻二の疔瘡治法に見え、多少文字の異同がみられるが内容に違いはない。

松鍼法について

松鍼法は以下の条件の場合に用いる。①瘡が虚軟の部位に生じ鍼灸が用いられない②瘡が両股間に生じ、毒気が腎に奔ろうとする③瘡が頭面上に生じる。また施術は必ず細絡に行うが、各部位の細絡が現れない場合には施術部位を詳細に見なければならない。松鍼の施鍼法は、北に向いた松枝上の極めて堅い葉を取って整えて一束にしたものを用いて、現れている細絡を切断して須く出血させるものである。松鍼の施術時には、先ず施術部位を酒で潤す。施鍼には必ず少し痛みがあるので患者に耐えさせる。よって雄黄、麝香の粉末を温酒で一二服させた後に松鍼を下す。この二薬は共に解毒散瘀の働きで癰疽を治する目的で用いる。

また桃紅散（四庫全書本紅作花）の項には「先以松鍼、鍼破瘡口、可深半寸。凡疔瘡必有紅絲路、可随紅絲路、斜下鍼、如瘡在胸以上、可斜向下、如在胸以下、可斜向上、蓋瘡毒喜趨心、故下鍼亦随毒気所行也」と疔瘡の発生部位により施鍼の方法及び方向に対する指示も見られる。

結語

松は常緑樹であり、その葉は針状で、北半球の温帯では手に入れ易い鍼具といえる。施術時にはきつく束にして用い、深くても半寸ほどの深さであり細絡を切り出血させるには十分と考えられる。砭石や鈹鍼用いるのに較べても施術時の痛みや出血が少なく技術的にもそれ程難しいとは思われない。救急時には十分使用可能なのではないだろうか。